

タイ国北部の言語調査について

西 田 龍 雄

1 ま え が き

1964年9月、私と三谷恭之、桂満希郎の三名は、バンコクから、ジープを使ってチェンマイ市に到着した。タイ国北部に居住する山地民の言葉を調査するためである。三谷君は、主としてモン・クメール系のラワ語(Lawa)、カメート語(Khamet)の調査に、私と桂君はチベット・ビルマ系の言葉を調べるのを目標にしていた。数日後、三谷君は、飯島さんのお世話で無事ボールワンのラワ村に到着した。私と桂君は、まず山地民の言語調査に必要な北方タイ語(普通はカム・ムアンといっている)を勉強することからはじめる。ひと口に北方タイ語といっても、チェンマイ(Chiangmai)と、チェンライ(Chiangrai)やランパーン(Lampang)などで、それぞれ少しずつちがっている。桂君はすでに、バンコクで、ランパーンのタイ語を調査していたのでかなりの知識をもっていた。とにかく、準備した調査リストに、つきつきと、チェンマイの北方タイ語形を記録し、録音する。インホームントは、はじめは坊さんを選び、つきにかなり年輩の一般人になってもらった。この二人のインホームントは、発音の面でも語彙の面でもそれぞれの特徴をもっていて、有益であった。最後に別の一人から、物語をいくつも話してもらって録音する。この人は期待した以上に話が上手であった。この物語など、チェンマイ・タイ語の文法形態を分析する資料になる。チェンマイ・ラオ文字と呼ばれる古体の文字がかって使われていて、一部の人は今でも使っている。この文字の正しい読み方を教えてもらって調査を一応打ち切った。調査語彙は1500程度で、さほど多いというわけにはいかないが、それまでにあまり明瞭にわからなかった北方タイ語の体系がかなりはっきりとわかってきたことと、この北方タイ語の知識が、あとの山地民言語の調査におおいに役立つことになった。

このような準備をして、私と桂君は、チェンライに

向った。10月の中頃である。

2 山地民言語研究の概況

チェンライ県とターク県(Tak)で、私はいろいろの山地民と接触した。ミャオ族(miao)、ヤオ族(yao)、ラフ族(lahu)、アカ族(akha)など十部族をこえる山地民を見てきた。その中で、実際にかなりの時間をかけて調査することができた言葉は、アカ語、ラフ・シ語(lahu-shi)、ラフ・ナ語(lahu-na)、リス語(lisu)、ビス語(bisu)の五つの部族語である。もっとも、このほかにチェンライ県でヤオ語を少し記録し、タイヤイ(taiyai)語を長時間録音する機会をえたが、まとまった調査はしていない。

これらの言葉の実体はいずれも、今までにほとんど知られていなかった。アカ語にしても、報告はあるにはあったが、もちろん言語学的な記述ではなく、タイ国内にいるアカ族の報告でもなかった。ことにビス語は、今回はじめてその存在がわかった言葉である。新発見の言葉とはいっても、これに類似する性格をもった言葉の存在は、ビス語という名称を与えられてはいないが、従来断片的に多少の語彙が発表されていた。Roux が報告したラオスの P'u noi と呼ぶ部族の言葉がビス語の性格に近く(Roux, H. *Deux tribus de la region de Phongsaly, (Laos septentrional)* BEFEO (24) 1924), A. F. G. Keer の発表した Kamburi のラワ語というののもちょっとビス語に似ている(Two 'lawā' vocabularies, JSS 21, 1927)。また調査する立場からいえば、さきにあげたアカ語とかラフ・シ語などもその存在はわかってはいたけれども、どのような言葉であるかの詳しい報告は、今までになかったのであるから、まったく新たな立場から出発して記録していかなければならない点では、新発見の言葉と異なるところがないのである。このあたりの少数部族語は、同じ部族であっても、部族ごとにより違っていて、正確には、どこそこの何語というようにいう必要があるか

ら、事実はその以上に厄介なことになってくる。アカ語やラフ・シ語に比べて、ラフ・ナ語とリス語には、まとまった資料が発表されていた。ラフ・ナ語には、J. H. Telford の *Handbook of the lahu (Muhso) language*. Rangoon 1938 があり、リス語には、J. O. Fraser の *Handbook of the Lisu (Yawyin) language*. Rangoon 1922 と中国科学院少数民族語言研究所編『俅僂語語法綱要』1959がある。これらの資料はかなりの量があり、たしかに有用ではある。しかし、Telford の書物はビルマにいるラフ・ナ族の言葉についての報告であり、Fraser の対象になったのは、ビルマのリス語騰越方言であり、中国科学院の報告は、雲南省怒江にいるリス族の言葉の研究であって、タイ国にいるラフ・ナ族、リス族、もっと限定して、私の調査したターク県のドーイ・ムッソー (Doi Mussuh) にいるラフ・ナ族、リス族の言葉の実体は、まったくわかっていなかった。その意味では、今回の私の調査はいずれもはじめての言語調査であるといつて差支えない。それぞれの地点でたずねてみると、これまでに言語学の専門家がおとずれたことがないという返事であったから、すでに調査されていて、未発表の状態にある資料も全然ないことになる。

これらの部落の居住地は今では明らかではないが、中国の西北部からチベット一帯にかけて居住したことのある民族集団の一員であったことはほぼまちがいない。その大きいグループが次第に南下して、ビルマに入り、そしてタイ国に移って来た。何故これらの部族の言葉を調査するかという理由をここで少し説明しておきたい。もちろんいま述べたように、これらの言葉がまだ言語学的に調査されていないことも大きい理由であるが、そのほかにもなお理由がある。

この五つの言葉は、系統的にいうと、いずれもチベット・ビルマ語派のビルマ・ロロ語系に所属している。チベット・ビルマ語派と一概にいても、実は、それに所属する言葉相互の関係がよく証明されていないのが現状である。たとえば、その語派の代表的言語であるチベット語とビルマ語をつき合わすと、全体の Construction はよく似ているけれども、両者の対応関係を法則的に証明できる単語の数は300語程度をこえない。チベット語には、古代語・文語・口語を含めて大きい語彙のストックがある。ビルマ語もそれには及ばないが、やはり豊富な語彙を貯えている。それら

の中で両者に共通した形をもつ語彙がわずかに300語というのは、いかにも少ない。この事実は、チベット語とビルマ語が同系統の言葉ではないことを示唆しているのではなくて、この二つの言語は実際には同じ語根から来源した形をずっと多くもっているのであるが、文献に記録された時期にはすでにそれらが変形してしまっていて、両者のつながりが不明瞭になっていたことを意味している。それ故、両者の間のかくれた関係をまず見付けだしていかなければならない。そのためには、チベット語とビルマ語を直接につき合わせるのではなくて、チベット語にもビルマ語にもそれぞれを中心とするグループをたてて、そのグループの内部でまず比較するという手順を経ておけば、言語変化の一般的な性格からいって、二つのグループの間にずっと多くの共通点が生まれるにちがいないと私は考えた。つまり、両言語のつなぎの役割を果たすような性格の言葉が要求されてくる。しかも、多くの生きた言葉が、とくに未調査の現在話されている言葉が、そのつなぎのために有力な根拠を提供する可能性が非常に強い。私はこのような目的から link languages をいくつか求めてきた。以前にビルマのカチン州 (Kachin) で、この link の一端をになう言葉として、マル語 (Maru) とラシ語 (Lashi) を調査した。この両言語の形態は明らかにビルマ語系の性格を具えていて、ビルマ語形と極めて近くしかもチベット語とのかくれたつながりを部分的に証明する。link language の形がどのような証明力をもっているかについて、簡単な見本を一つ示してみよう。たとえば、基本的な単語の一つである〈橋〉は、ラッサ方言では sam-pa, チベット文語では zam-pa である。古代チベット語では *dzam-pa の形が想定できる。これに対してビルマ口語では tadaa または dadaa といい、文語では tam taa² と書く。この両者の形が直接つながるかどうかは、はっきりしない。一方、マル語とラシ語では、〈橋〉はつぎの形をしている。Maru (M. ミッチィナの方言), dzèŋ (B. バモーの方言), dzèŋ (下降型), Lashi dzàm (低平型), マル語の -eŋ と、ラシ語の -am は規則的な対応形であって、ともにビルマ語の -am にあたる。この対応規則にあてはまる別の例を出すと、〈hair〉 Maru (M) tshèŋ: (B) tshèŋ (下降型): Lashi tshàm (低平型) — Bur. tsham-paŋ がある。そして、マル語の dz- とラシ語の dz- は、とも

にビルマ語の tšh- に、これも規則的にあたる。ビルマ語では dz- も tsh- もともに tšh- になる)。ex. <thorn>, Maru(M) dzáo (高平型): (B) dzú (高平型): Lashi dzú (高平型) → Bur. tšhuu²。それ故、法則からいえば、<橋>の古代ビルマ語形は *tšham-*taa* でなければならず、その前の段階は *dzam- であったと推定できる。そして、その形がチベット語形 zam<dzam とはっきりと対応することになる。(cf. Tib. dzom: Bur. tšh- には、<建てる> Tib. h̥dzug-pa∞zug-pa. Bur. tšhok-æfi etc. の例がある)。この関係を表にするとつぎのようになる。

<bridge>	Ancient form	Modern form
Tibetan	dzam-pa> zam-pa	→ sam-pa
Burmese	*dzam>tšham-	→ ta daa
Lashi	dzam	→ dzam
Maru	*dzam	→ dzeŋ

link language の形は、簡単にはこの種の証明力をもっている。しかし、このような証明に成功するためには、適切な言葉を見付けることと、その言葉を正確に記述することが必須の要件になる。

一般的にいて、一つの stage からつぎの stage へと言葉が変遷する場合、いろいろと複雑な現象が起りうるが、形の上からは、つぎの3つのタイプがある。

1) もとの形がそのまま受け継がれていく。2) もとの形自体がある音韻変化をおこして変形し、融合したり分裂したりしながら受けつがれていく。3) もとの形が全部または一部の環境でまったく別の形によって置き換えられてしまう。

ある一つの共通体から分離したいくつかの言語が、第1のタイプをとって変化した場合は、言語間の対応関係が非常にはっきりしているのが普通である。第2のタイプをとるときには、その変化が規則的にあらわれておれば問題はさほど複雑ではないが、その変化が個別的に不規則的に起ったとなると、あとの時代の事実から、それらを跡付けるためには、主として同系統の言葉の形にたよるより外はない。第3の変化もまた多いのである。借用語によって、あるいは別の派生形式を作ることによって、多くの単語の形が新しい形に置き換えられていく。この場合にもやはり、同系統の言葉の形によって、もともとの形式を再構成しなければならない。チベット語系とビルマ語系に属する言語には、2), 3)のタイプの変化がはげしく起ったらし

い。

東南アジア地域言葉の中には、タイ語系の言葉はさほどではないが、モン・クメール系の言葉もやはりこのタイプの変化が著しい。

私は、タイ国の北部には、ビルマ・ロロ語系の言葉で起った 2), 3) のタイプの変化を跡付けることのできる、そしてチベット語系との link の役割を果し得るような適切な言葉が多く存在するにちがいないとかねがね考えていた。その意図の一端が、今回の調査で実現できたわけである。



写真1 Saenchai のアカ部落の村長さん

3 セーンチャイのアカ部落にて—アカ族とアカ語

10月18日 私と桂君はチェンマイから空路チェンライ市に到着した。早速、この県の副知事に面会する。National Research Council からの紹介状のおかげで、今後の調査に支障のないよう便宜をはかってもらえることになった。翌日県庁のジープで Nikhom のあるメ・チャン (Mae Chan) 郡の郡長官舎まで送ってもらう。そこからは郡長の所轄になって、郡長の派遣したジープで秘書とともに Nikhom に向うことに

なった。この手続をふまないと Nikhom に入れない。少くとも Nikhom で何らの便宜をも与えられないだろう。メ・チャンから Nikhom への道は、泥地が各処にあって、ジープを四輪動力全開にしてやっと通れるところが多い。雨のあとなどは橋がおちて、メ・チャンで足どめをくうことがある。ともかくひどい道である。

アカ部落は Nikhom から西北5km ほどの地点にある。かねて聞き及んでいたように、なるほどアカ族は汚い。タイ人にアカ部落に行くといえば、何と物好きだとゲラゲラ笑い出すしまつで、アカ族は山地民の中でも、ピー・トン・ルアンという怪げな一群を除けば、最低級だと考えられている。その村長に会うのであるから、なるべく直接身体にふれないように、挨拶もタイ式に自分で両手を胸の前に合わせようとした。ところがそれよりも速く村長は長い猿臂を伸べて握手を求める。このことからでも、この部落のアカ族は、すでに外来者ことに外国人との接触がかなり頻繁であることを十分に示している。このセーンチャイ (Saenchai) のアカ族は、アカ族の中でもっとも開け



写真2 アカ族の女性 (村長の家の前にて)

た部落であって、われわれにとって便利な点もあれば反面悪い面も少なくない。私たちにアカ語を教えるのにも、早速、一日20パーツの契約を要求する。

アカ語の調査は、桂君と二人ではじめた。村長の何人目かの息子 Amya がインホームントになって、われわれの質問に応じてくれた。もちろん見物人が大勢である。ともかく見物人は笑いが多い。テープコーダーは、見物人の笑声も用捨なく吸収してしまう。あとで録音を再生すると、それが案外調査の雰囲気をも再現して、なかなかよいものである。言語調査のインホームントには、誰でもがなりうるわけではない。適度の理解力をもって勘がよくないとできない。この点 Amya は乱暴ではあったが、よいインホームントであった。Amya にかわって、父親が村長の名にかけてもと一度やって来た。この村長は、タイ語は不自由なく話すのであるが、単語を一つづつたずねるとなると、正確には返答ができない。少くともすぐには返答が出てこない。それに一語を聞けば、数語を答え、一語がやたらに長ったらしい。どうやら余分のことをいくつもつけ加えているらしい。村長は一日で手をあげてしまった。やはり若い息子の方が勘がよくて、やり易い。アカ語の調査は順調に進んだ。この言葉の性格が次第にわかってきた。まず、その発音には全体として著しい特徴がある。閉鎖音と破擦音には、無声音と有声音の対立があって、無声音にはまた無気音と出気音の対立がある。無声無気音は普通の [p] [t] [k] [ts] [tʃ] であるが、無声出気音と有声音は素直な性格ではない。IPA で書くと前者は、[pʰ] [tʰ] [kʰ] [tsʰ] [tʃʰ] となるように無声の摩擦音をともっており、有声音の方は、[bɦ] [dɦ] [gɦ] [dzɦ] [dʒɦ] のように有聲摩擦音がく出わたり>にあらわれる。そのほか [χ] [ʁ] [h] [ɦ] [ʔ], [s] [z] [ʃ], [l] [j], [m] [n] [ŋ] [ɳ] といった音声記録される。あとで整理すると、子音の機能単位は29種になった。子音結合は [pi] [pʰj] [bɦj] [mj] の4種で、母音は [ø] [œ], [w] [x] [i] [u] [ɐ] [ɔ] [a] の9種が観察され、いずれも機能単位と認めうるものであった。。一つの音節は、子音+母音、(母音は鼻音化母音一種を含む)の型をとり、それに一つの声調が加わる。そして、たとえば [dm̩]/dm/ のように母音の位置に [m̩] があらわれるのも、この言葉のおもしろい特徴である。声調は、高平型、中平型、低平型(最後がゆるい下降

型になる)の三種の平板型トーンの対立から成りたち、register tone システムである。もっともこの基本声調が連続するときに、いろいろもとの調子に変化を与える現象が認められる。たとえば、低平型と低平型がつづいたときに、中平型と低平型になるというように。

アカ語のいま一つの大きい特徴は、声調とは別に stress があることであって、enclitic でない最後の音節には、はっきりとした stress がおかれる。ex. [k'w] [fé:] <flea>, [fɛ] [mó:] <louse>。この [fé:] と [fɛ] は、同一の単位であるが、前者には stress があり、後者にはない。stress のない音節の母音は短かく、stress のある音節の母音はつねに長い。2音節の単語では母音はいつも、短・長 [v·v:] の型をとる。このタイプの単語がアカ語のなかで圧倒的に多い。

数詞は1から10まではそれぞれ個有の声調をもつが、20以上は2音節ですべて同じ型の声調と stress をとることになる。これもおもしろい現象である。

1. ti:+ 2. ni:+ 3. sm] 4. ?ɸ:] 5. ga:]
6. kɔfi+ 7. ji:+ 8. je:] 9. gfiæ:] 10. tshɛ:]
20. ni] tshé:] 30. sm] tshé:] 40. ?ɸ] tshé:]
50. ga] tshé:] 60. kɔfi] tshé:] 70. ji] tshé:]
80. je] tshé:] 90. gfiæ] tshé:] 100. ti] já:]
200. ni] já:] etc.

私は、この言葉がビルマ・ロロ系言語一般に見られる<音節高アクセント>から、日本語的な<単語高ア

クセント>に移項しつつあるのではないかという疑いをもっている。そして、またこの系統の言語と日本語との系統的な関連をも、くわしく研究する前に、全面的に否定しすることはできないと思う。単語の配列方法が似ているとか、アカ語の動詞がすべて /-fiw/ に終わっているとかの外面的な類似だけではなく、もっと本質的な並行関係を何か発見できるかもわからない。しかし、そのような問題に先走るまえに、この系統の言葉自体の調査を押し進める必要がある。

タイ国には、アカ族は全体で12,562人いて(1,998戸)、110村落があると報告されている。おそらく村落ごとに言葉が違っているのであろう。桂君は、その後、2,3の村落をおとすれているから、その相違についての報告を発表するものと期待できる。

アカ部落への入口は、普通は一カ所に限られて、部落の東の方にある。その入口には、精霊よけの門と、門の脇に性のシンボルがおかれている。これがアカ族の特徴の一つとされている。木彫りの女性体の股間に、男性のシンボルが挿入された形をしていて、等身大の大きいものである。アカ族の子供は、男女とも大ていは裸体で、少し大きくなって、下腹部に腰巻の短かいのをまきつける。女子はごく年少のときから、頭にコインを縫い付けた飾り物(アカ語で ?útshóe という)を離さない。これは病気でも、眠るときでも、死んでからでもなおつけておくらしい。セーンチャイのアカ族の家は、村長の家のみが木造りで、そのほかは竹とハッパ作りである(約45戸で350~400人位が住む。1戸あたり7~8人)。

アカ族は何といっても不潔である。身体を洗わない。女の子はそうでもないのであろうが、普通は一年に2,3回しか水あびをしない。彼等の絶対的な恐怖は精霊であるから、水あびによって水の精霊が身体に侵入することを極度に恐れるのである。人間の死は、何かの精霊が身体に入りすぎたために起るものであると信じて疑わない。人間が死にかけると、巫師が三日三晩祈りつづける。この部落では村長の長男が巫師をしていて、村では2番目の実権をにぎっ



写真3 アカ部落の玄関



写真4 アカ族の男の子たち（村長の家にて）

ている。それが帽子をかぶり、手に精霊を払う杖をもって祈りつつける。その扮装は Na-khi 族の巫師とまったくよく似ているが、残念なことに、ここには Na-khi 族がもっているような経典類は一切存在しない。

アカ族は文字をもたない。アカ族だけではなく、タイ国北部の少数民族たちは、依然として文字のない社会を今まで維持してきている。近くにタイ文字があり、ラオス文字があり、ビルマ文字がある環境のなかで、文字のない生活を保持してきたことは、不思議に思われてならない。文字が使われていないということは、ただ文字がないことのみではなく、何らかの文字で書きあらわされうるにたるように言葉自体がまだ整理されていないことを意味する。言葉が一応整理されておれば、たとえ自分ら固有の文字を創作しなくても、近隣の文字を借用することが容易にできたはずである。私は自分らの言葉を文字で書き表わすということがいかにむづかしいかを、つくづく痛感した。やはり、この部落からすぐれた人物が出てこない、実現しないのであろう。

アカ語には、文字という言葉はある。そして＜書物＞を意味する単語もあるが、＜紙＞と同じ形をもっている。/sù gá/ という。言葉の形の上では、文字を書いた紙（＝書物）と紙とは区別しないのである。そして＜よむ＞と＜数える＞も同じ形で /rúfiu/ という。それ故 /sù gá rúfiu/ とはいえ、＜書物を読む＞のか＜紙を数える＞のかわからない。もっとも

＜本を読む＞ためには頁をめくっていかねばならないから、書かれた文字を無視すれば、＜紙を数える＞ことになる。日本語でも＜読む＞と＜数える＞（数をよむ）は同じ形をとっている。

ここにはおもしろい表現がだいふある。＜暑い＞jò-tshá tsháは＜暑さが暑い＞と表現し、＜寒い＞jò-ga ga は＜寒さが寒い＞という。これに対して＜暖かい＞は＜暑さが暑くない＞jò tshá ma-tshá, ＜涼しい＞は＜寒さが寒くない＞jò-ga ma-ga と表現する。＜暑さ＞＜寒さ＞というのがあって、それがどう

いう状態にあるかを説明するわけである。

アカ族の方からも、われわれにいろいろと質問が放たれる。真面目な質問を二三紹介しよう。

日本にもアカ族がいますか？ 日本では太陽は西から出て東に沈むのですか？ あなたは日本から自動車で来たのですか？ 私は一カ月バンコクにいたことがあります、あなたはバンコクに行ったことがありますか？

もっとも困ったのは、日本から自動小銃の弾丸を送ってほしいという村長からの要求である。

アカ族は陸稲を作って、10月から11月にかけて稲刈りをする。日本と同じように鎌で茎の下のほうから切りとる。彼等の常食は、米に稗のようなものをまぜて食べる。副食は大抵は、生肉と gonpatšhe という漬物である。アカ族は犬を食べるといってほかの山地民から、からかわれるが、今はほとんど食べないらしい。ここにはトイレがない。人間の排泄物は、つぎのような循環で自然に処理される。人間の糞を犬が食う。犬の糞を豚が食う。豚の糞を鶏が食う。鶏とその卵を人間が食う。

この部族にもタイ語を教える小学校がある。小学校とはいっても、屋根と机と黒板だけがある小屋で、そこにタイ人の教師が二人いる。その中の一人は、およそ標準タイ語を教えるのにはふさわしくないタイ語を話していた。授業は休んで、彼等はいつも自動小銃を携帯し、スクータで近辺を走り廻っている。実はその方が本職であって、学校の先生の方が余業である。

というのは彼等の正体はボーダー・ポリスなのである。学校のあるところは非常に地の利を占めていて、そこから双眼鏡でのぞくとビルマ側の山山が手にとるように見える。このアカ部落は、ビルマからの公ではない通路の要処にあたっているらしく、シャン州からの避難民がいつもやってくる場所である。この部落で、タイ国にはいないはずのパラウン族 (Palaung)、ワ族 (Wa) をも見かけたことがある。このあたりにはまた、かつての中国国民党の精鋭部隊がいる。定住地がなく、テントをはって野宿し、ジープと馬の機動力で、タイ側とビルマ側を往来している。そのうえ山地民部落を略奪するらしい。ビルマからの移住民がはげしく入国してくることも関連して、昨年 (1964) 11月から12月にかけてのアカ部落近辺は、かなりの緊張感につつまれていた。

4 ラフ・シ族とラフ・シ語

メ・チャンのラフ・シ族は、ビルマからの新しい避難民である。昨年の6月 (?) 頃にタイ国に移って来たといっていた。私たちがはじめてメ・チャンの



写真5 ラフ・シ族の娘さん

Nikhom に行ったとき、immigration officer が、ラフ・シ族の家族調査をしていて、各家族ごとに登録表に書き込み写真をとって、個人ごとに指紋を押させていた。それまでは、まだタイ国籍になっていなかったのである。今でも北部タイには、タイ国籍をもたない少数民族族がかなりいる。その多くはビルマからの移住民であるが、ここ1,2年のうちには、北部タイの部族図になお少数の部族名をつけ加えねばならないであろう。

このラフ・シ族は、戸数にすると30戸あまりの小さい集団で、共通語はラフ・シ語のほか、ビルマ語またはシャン語が通じる。タイ語はまだよく話さない。彼等は全部クリスチャンで、教会こそないが日曜日には讃美歌を歌い、仕事も完全に休んでしまう。まれにビルマで教ったローマ字で大体自分の言葉を書くことができる人もいる。彼等はもはやアカ族のように精霊を怖れたりはいしない。多くの点で、アカ族とラフ・シ族は対照的な感を受けた。アカ族の村長の息子は、私にはっきりといったことがある。“アカ語には尊敬するという言葉はないのです。私達は他人を尊敬などしないのです。” 彼等は自分の力のみを信じ込んでいる。ラフ・シ族は、もっと教養がある。外国人にはちゃんと敬意を払うし、礼儀も心得ている。

私が三度目にラフ・シ部落をおとずれたときには、部落全体がチェンライの南のメ・サルイに移動してしまっていた。Nikhom の代表者の話では一夜のうちに全部移住したという。私は驚いて、なかば調査の続行をあきらめていたが、ちゃんと約束の日に、私のインホームントはあらわれた。そして、はじめにいたところでは発展性がないから移動したのだという。これらは宣教師ののこした大きい功績の一つであると思う。

ラフ・シ語のインホームントは若い既婚の女性である。ラフ・シ語とラフ・ナ語を話し、ビルマ語を理解する。調査にはその主人がいつもついて来た。主人はシャンの名門の出で、数種類の言葉を話す、奥さんとは主にラフ・ナ語で通達していた。調査は、私のビルマ語での質問に奥さんが答えて、わからないところは、主人がわかり易いラフ・ナ語で説明してくれるので非常にうまくいった。言語調査でもっとも不安なことは、インホームントが明日もまたたしかにつづけて来てくれるかどうかということである。この点、私のインホームントはよかった。主人は頭痛にもめげず、腹痛にも耐えて奥さんについてやって来てくれた。頭

痛にも腹痛にも私のもっていた薬が効果をあらわしたのでより以上に協力してもらえるようになった。ラフ・シ語はアカ語とは大分違っている。第一に声調の数が多し。七声もある。そして、文法構造はかなりシステムティックである。動詞にはつねに *-vèi* がつき、大部分の名詞には *ʔə*, *a-* がつけられる。たとえば、*hũ-vei* <(蓋をついてないものに)蓋をする> に対して *ʔə-hũ* <(くっついていない)蓋> があり、*bè-vèi* <(蓋のついているものに)蓋をする> に対して、*ʔə-bè* <(くっついている)蓋> がある。そして、*ʔə-hũ hũ-vei*, *ʔə-bè bè-vei* といえる。*-vèi* のかわりに *tũ* をつけると道具をあらわす。 *phéi-vèi* <扇ぐ> から *phéi-tũ* <団扇> が作られ、*ʔə-vèi* <漕ぐ> から、*ʔə-tũ* <(漕ぐもの)=櫓> が派生する。おもしろい表現もある。<舐める> は *lê-vèi* で、<塩> は *ʔa-lê* (舐めるもの)、<甘い塩> *ʔa-lê mē* となると、これは<砂糖>の意味になる。<読む> と <数える> が同じ形であるのはアカ語と同じであるが、ラフ・シ語では、<書物> と <紙> は違った形であらわされるから、<書物を読む> は *li-kũ ʔə-vèi*, <紙を数える> は *ka-lă ʔə-vèi* となって、アカ語のように形の上で混同しない。ラフ・シ語には、<深い> という言葉はあるが、<浅い> はない。<深くない> と表現する。問いつめると <短い> と同じ言葉で答える。山地民の生活では実際には <浅い> がとくに必要ではないのである。たとえば、河を渡るのに、<深い> <深くない> で十分である。

この言葉には、このほかにも興味のある特徴がいくつか観察された。

5 タークのドイ・ムッソー (Doi Mussuh) にて——ラフ・ナ語の調査

今年(1965)に入って、私は調査地点を南のタークに移した。1月8日、チェンマイからジープでタークにつき、翌日、やはりターク県庁副知事の紹介で Nikhom に落ち着いた。ターク市から Nikhom までは38km、ここで2月4日まで私はラフ・ナ語とリス語の調査に集中した。

ラフ・ナ語の調査は2人のインホームントについて行った。一人は18才の青年A、いま一人Bは50才である。2人ともタイ語を話す。調査を進めていくと、この2人の話すラフ・ナ語にかなりのくい違いがあるこ

とがわかってきた。言語学にとって、このような相違はむしろ有難い。この2人の年齢層の相違が、言葉の面に反映しているものとはじめは理解したからである。ところが次第にそうでないことがはっきりしてきた。というのは、青年の方はタイ語がずっと上手である。上手ではあるが、タイ語を習得するのに熱中したためか、母国語であるはずのラフ・ナ語をあまり正確におぼえていないのである。この傾向は、山地民の若者の間に全般的に広まっていくのではないだろうか。ことにタイ人との接触が多いラフ・ナ人の中では十分に予測できることである。アイヌ族などとも共通する文字をもたない少数部族の宿命であろう。数日後から、調査はインホームントB一人にしぼった。

ラフ・ナ語の調査は、さきにメ・チャンでラフ・シ語の調査を終えていたために、かなり調子よくはこんだ。短い期間に、多くの資料を集めることができた。山地民の言葉の中で、一番むづかしいのはリス語で、一番易しいのがラフ・ナ語である。山地民の間の通達、普通はラフ・ナ語でなされている。私もラフ・ナ語をかなりわかるようになった。この調査では、一応えた資料を、別のいろいろの面から再確認した。私の今回の調査の中でもっともうまく資料をえた対象は、このラフ・ナ語である。インホームントが誤った答をしても、やがて見破れるようになった。山地民相手の調査では、彼等の教えてくれることをすべて素直にそのまま信頼できないことも多いのである。その原因の半分はこちら側にもある。というのは、提出した質問が相手に十分理解されなかったことから起る場合が多いからである。たとえば<蠅>のつもりでいろいろ説明して聞いたところ、その答は [pa+ tʃi:] という。どうもおかしい。これを気にしていたところに、ちょうど蠅が数匹飛んできて、その誤りがわかった。<蠅> は [su: 'ma] である。[pa+ tʃi:] というのは<いなご>のことであった。そして<いなご>に対して答えた [pa+ tʃi] noe: +] は<青いなご>の意味であった。<咳をする>の意味で聞いた [tsu: 'na: 'na:] が正しくは<風邪>であって(直訳すると<咳が出る病>)、<咳をする>には [tsu: 'lu: +] という単語があったりする。<母親が子供をしかる>が、<母親が子供を教える>であったりする。これらの誤りはいろいろ検討しているうちに、大抵は発見できる。

年をとったインホーマントの方は、村一番の物知りであったのは幸なのだが、長時間質問をつづけると頭がもうろうとなってきたとんちんかんな返答をする。というのは、この人は阿片中毒者なので、だんだんと薬が切れてくるらしい。数日して、かならず薬をのんで来るように約束する。その上、この人はアルコールの方にもいかれている。毎日調査を終えると、酒代の無心である（1日3 パーツほど）。酒代のサービスが習慣となってしまった。私はラフ・ナ語を一応終えて、リス語に取っ組みつつもりであったために、かなり急いで午前中3時間、休息2時間、午後3時間というように一日約6時間ほど頑張った。インホーマントには気の毒であったが、それだけの収穫はあった。

ラフ・ナとは<黒いラフ>の意味であって、その呼称のとおり、男も女も黒い服をまとっている。小さい子供は昼間は裸体のもいる。馬をかなり飼っていて、子供でもじょうずに裸馬を乗りこなしていた。男は仕事に出掛けるときは、腰に銃（a thò）をぶらさげ、手には円筒形の手箱（i-kù）を大切にそうもって行く。手箱の中には、おやつが入っている。白い



写真6 ラフ・ナ族の壮年

塊、青い葉っぱ、赤色の種子、色とりどりである。ちょっと一服となると白い塊り（thùg）を青い葉っぱ（桑の葉のごとし）に塗って口に入れる。それでスーとする。何度も口の中で嚼んでからはき出す。彼等の清涼剤である。

ラフ・ナ族は、インコ（pè tsù）を飼うことでも知られている。畑仕事に行くときも、いつもインコを十字の木にとまらせてつれていく。これは単なる趣味で飼っているのではない。一つの収入源である。Nikhom のタイ人のお医者さんに頼んでタークの町で売ってもらおう。一羽いくらかたずねたが、いかなかった。

この部落はかなり大きく、全体で100戸ぐらひはある。ほかの部落のように斜面にたっているのではなく、広い平面の上にある。Nikhom がそこから500米ぐらひのところにあるのも、この部落の開放さを示している。もっと特徴的な印象を与えるのは、部落の中に物を売る小さい店家が二、三軒もあることである。籐ブラシ、卵、乾燥麵（香港製）、布類などを売っている。しかし、その商売をしているのは、北方タイ人であって、ラフ・シ人ではない。山地民はまだ商売をさせてもらえない。部落から少し下ったところに筧があって、山の上から水を引いてきて、水浴びができるようになっている。そこにも筧をはった茶店が三軒ほど並んで建っていて、ちょっとした食物とか衣類を売っている。ただ水浴びするための場所ではなく、ラフ・ナ人は一切の水をここから運んでいく。部落の唯一の給水源である。水汲みは、大抵は子供の仕事ではあるが私などはやっと持ちあげられるほどの重さの水を竹筒（i-ká dè）に入れ、その筒を数本竹籠（a-kà）につめ込んで、はちまき型に背負って急な山道をかけ昇っていく。

ラフ・ナ族の仕事の一つに伐採がある。ずい分大きい木を切って部落まで運んで来る。その運搬には象を使う。象使いはカレン人（Karen）の仕事になっていて、一日3 パーツから5 パーツ（約60円から90円）が、彼等の日当である。一日とはいっても実際には半日ぐらひしか働かないらしい。しかし、この事実は、山地民が別の山地民を使っている点で、そして仕事の分業が成りたっている点で大へん興味がある。ラフ・ナ人の木材の販売は、おそらくタイ人をつうじてなされ、とくに Nikhom の管轄のもとになされているよう



写真7 ラフ・ナ族の娘さん

に、私は理解した。彼等の住居は、大体竹製であるが、木造のも数軒あった。そして大抵の家は、近くに別棟の小さい穀物入れをもっている。古い家も多いが、新しい家に建てかえているのがめだった。

この部落は、山地民の中では、タークのミャオ族とともに最高の段階にいらっているのであろう。少くとも、私がおとずれた限りではそうである。さきに述べた茶店とともに食堂らしいものも一軒ある。もっとも食堂とはいっても、日本のめし屋のごときを想像されると実際とは大分距離がある。ラフ・ナ人の説明によると、独身のものとか身体の悪い者が利用する一種の共済施設だそうである。これはもちろんラフ・ナ人がやっている。

6 リス語の調査を中心に

山地民のインホームントに理解されにくい単語は、大体共通しているようである。事物の名前であると、へたでも絵を書けばたいい通じる。どんなにまずく書いても、多くの場合感心して試している。山地民のほとんどは物の輪郭をとれないからである。ところが＜動く＞とか＜はじまる＞とか＜終る＞といった抽象的な状態になるとなかなかわからない。＜つづける＞なども何かに託して説明しても、多くの場合は誤解が生じる。＜変る＞とか＜変える＞も、いくら説明してもよくわかってもらえない。たとえば、手もとにあるものを取り出して“mophī (巫師) がこれを鶏に変える”などと説明しようものなら、“うちの mophī”

にはそのような魔力がない”と反撃されるだけでこれにはまずお手上げである。受身の形を聞き出すのも苦勞である。受身形はたしかにあることはある。もちろんそれが受身形だということを承知していないし、あまり使いもしない。たとえば、＜私は蛇を打つ＞＜蛇は私に打たれる＞これがわからない。そこで説明を加える。蛇を打つしぐさをして、ここに二つの立場がある、私の方は蛇を打つが、蛇の方はどういう立場にあるか？ 答えて曰く“蛇は人間に食いつく、間違っているか？”これでは調査が進まない。少し使えるよう

になったラフ・ナ語を用いて、リス語の受身形がやっとわかった。

私は蛇を打つ、guá fu: dè: a 私・蛇・打つ。

蛇は私に打たれる。fu guá dè fù yó 蛇・私・打つ・得る。

やはり、ラフ・ナ語と同じ構文をとっている。自動詞と他動詞の区別もこまる。リス語では形態素の形の上での対立はなさそうである。もっともつぎのようなのはある。

＜われる＞ bə-yu <わる＞ dè bə-yu 後者は実際には＜打ちわる＞の意味で、＜泣く＞ gu-a <たいて泣かせる＞ dè gu-a と同じ構成である。

タークのリス語は、雲南省のリス語、ビルマのリス語と多くの点で違っている。まず声調がちがう。子音の体系、母音の体系も同じではない。このリス語で＜勝つ＞と＜利口＞、＜負ける＞と＜馬鹿＞は、それぞれ同じ単語であるという。この二つの組み合わせには少なからず驚いた。この社会では、何でも勝った者は利口で、負けた者は馬鹿なのであろうか。これとよく似たことがラフ・シ語にもある。＜悪い＞と＜愚か＞が同じである。tshò hâe <愚か者、馬鹿者＞は、直訳すると＜悪者＞ということになる。ラフ・ナ語では＜馬鹿者＞と＜唾者＞の区別があいまいであった。彼等にとっては、馬鹿とか利口とかの基準が、われわれの考えとはずい分とずれているためであろう。

7 ビス語について——バン・ルア方言

2月11日、私は、タークからチェンマイを経て帰ったバンコックから、ふたたびチェンマイにもどった。北方タイ語の勉強をつづけるためである。その翌日チェンライ県にラワ語の調査にいていた三谷君が、やはりチェンマイに帰って来て、チェンライ市の南方に、近辺の人はラワ族といっているが、ラワ語ではない言葉を話している部落があることを教えてくれた。飯島さんのすすめで、三谷君と私はさっそくその村落をおとずれることにした。それがビス村である。ビス族はかなり平地に近いところにいる。平地とはいっても簡単に近寄ることができない。三谷君の記憶をたよりに車で行きつけるところから、なお二つほどのタイ人の部落をくぐり抜けて、道のないところを進んだ。四十戸ほどの小さい村落である。私たちは一週間あまりかかって、約八百ほどの単語と数十の文章をノートに記録しテープに収めてひきあげた。彼らはビスと自称するから、これをビス語と名付ける。そして、そのほかにも三ヶ所ほどで同類の言葉が話されていることがわかっているから、この村落のビス語を、バン・ホーイ・サン (Ban Huai san) のバン・ルア方言、(Ban Lua) 簡単にバン・ルア方言と呼ぶことにする。これは今回の調査で一番最後にであった、そしてもっともおもしろい言葉であった。

この言葉の記述的な面からみた特徴をざっとあげるとつげのようである。

1. この言葉の音素体系は31種の子音、11種の子音結合、9種の母音、3種の声調からなっている。一つの音節は子音+母音、または子音+母音+子音の型をとる。
2. 子音には閉鎖音にも、鼻音にも、側面音にも無声音と有声音の対立がある。
3. 三種の声調、高平型・中平型・低平型の中、中平型の声調をとる母音はつねに緊喉音である。
4. 一つの単語は一つまたは二つ、あるいは三つの形態素の結合からなり、とくに二つの形態素が結合して作られる単語が圧倒的に多い。一形態素は大部分が一音節である。
5. 動作状態をあらわす単語と、それ以外の単語との区別ははっきりしていて、前者はつねに $-ŋə$ をともなう。事物の名前は大部分は $ʔaŋ-$, $ʔa-$ を前接す

るが、 $-ba$ を後接する単語もある。

6. 人称代名詞には、単数形、複数形のほかに双数(われわれ二人、あなたがた二人)の形がある。
7. 指示代名詞には、近称(これ)遠称(それ)最遠称(あれ)のほかに最最遠称があり、さらにそのきをあらわす形もある。
8. <来る><行く>の二動詞には、方向をともなつて、<南から北へ行く(来る)>か、<北から南へ行く(来る)>かによって違った使い方をそれぞれ一対の形がある。
9. 他動詞と自動詞の対立が形の上ではっきりとわかる単語が若干ある。
10. タイ語からの借用語が多く(約150~200)もとの形と<相補の分配>をなしている単語がある。数詞とか十二支は、タイ語からひとまとまりとして入ってきた借用語である。

系統論的な観点から見たこの言葉の性格はつぎのようになれる。

1. ビス語は、あきらかにアカ語、ビルマ語と同系統であつて、ビルマ・ロロ語系に属する言葉である。
2. ビス語の形式は、アカ語に比べて、より中古ビルマ語形式に近い。
3. 全体800語ほどの中、ビルマ語と対応原則をたてうる形態素は、約250ほどあり、ビス語とアカ語との間にもほぼ同数の同源語がある。もっともビス・ビルマの間、ビス・アカの間で同源語が必ずしも重複しないから、この三言語をまとめると、全体で300以上の同源語があることになる。
4. ビス語には、タイ語からの借用語のほかに、ビルマ語にもアカ語にも対応する形をもはや発見できない形態素が含まれている。それらは他の何らかの言葉(たとえばチベット語とかチン系統の言葉)と一定の対応関係をもちうるかどうかは今わからない。しかしビス語の中に、チベット語と相応じる性格を、たしかにいくつか指摘できる。ビス語は link language の一つである。

8 言語調査の目標

私たちの言語調査の目標は、単に特定の言語で、ある事物とか状態とか動作とかがどのように表現されるか、その表現が具体的にどのような調音方法をとってなされているかを知るのみではない。もちろんそのよ

うな観察を通じて進めねばならないが、その言語行動の背後にある特定言語の体系を発見して整理することにもっとも大きい目標がある。この仕事はしたがって簡単にはいかない。どうしてその体系を発見していくかには、いろいろの方法があるし、研究者自身の流儀もある。そしてまた言語の体系が一つではなく、いくつもの体系が入り組んでいるからなお厄介である。普通は、それらをいくつものレベルに分けて扱うことにしている。音素のレベル、文法のレベル、語彙のレベルなど、上にあげたおのおのの言葉について観察し発見した体系の一端である。つまり何よりもまず特定言語の記述的な研究が調査の目標になる。私の別の目標は、このようなレベルに分け、記述した一つの言語体系が、そのほかの言語と一体どのような関係にあるかを見極める点にある。この目的には、二つの立場が考えられる。その一つは言語類型学的な考察である。これはなかなか興味のある課題であって、原理としては、たとえばAという言語をとりあげると、A言語の体系と構造は、それ以外のすべての言葉の体系と構造と比べうることになる。第二には系統的考察、これについてははじめにも書いたが、繰返して簡単にいうと、個々の言語について、たとえばアカ語の系統はどうか、ラフ語の系統はどうか、その言語支派の中でのどの点に位置づけるかについての論証である。

たとえば、アカ語とビス語は、全体の構造がよく似ているし、その体系も類似していて、大ざっぱに見れば、ほぼ同じ類型に属する言葉であるとして扱える。ところが、それを系統的に見ると、個々の体系を形成する成員が、各言語の組み立ての中で、ちがった面になっていることがわかる。このことについてもう少し述べてみよう。子音の体系全体を扱うと面倒になるから、その中、閉鎖音のみを取り出してみることにする。アカ語にもビス語にも、無声無気音、無声出気音と有声音の対立がある。

Akha /k kh g p ph b t th d/

Bisu /k kh g p ph b t th d/

これらの9つの単位が、各言語の体系の中で張りあう関係がまずちがっている（アカ語は子音29種などの体系の中での9単位、ビス語は子音31種などの体系の中での9単位）上に、さきに述べたごとくアカ語の /g/ は実際には [gʰ] であったり、ビス語の /g/ が [g] または [ŋg] であるように、/g/ に該当する音声の性

格がちがっているが、閉鎖音のみに限定して対立関係を見るとときには、まったく同じ類型に属することになる。ところがこれを系統的に考えると、ビス語の /g d b/ はアカ語の /g d b/ に対応しないで、/ŋ n m/ の方にあたる。そしてビルマ語の /ŋ n m/ にもあたるのである（一方、アカ語の /g d b/ はビス語の /k t p/ に対応する）。たとえば

	'I'	'pain'	'fire'
Akha	ŋa	ʔa-ná	mì-
Bisu	ga	ʔaŋ-dá	bi-tho
Old Bur.	ŋa	ʔa-na	mi ²
Modern Bur.	ŋa	ʔa-na	mi ²

より古い時代で有声鼻音にはじまった形式を、ビス語では鼻音でになわないで閉鎖音で受け継いだことになる。ビス語ではのちのある時期に ŋ→ŋg→g ([ŋg~g]), n→nd→d ([nd~d]), m→md→b ([mb~b]) の変化と、g→k, d→t, b→p の変化が起って、結果から見れば、音素の対立関係自体には大きい改変はあらわれなかったが、受け継がれた意味、形式のいない手が大きく変った。このような古い時代の意味形式をどのようにになっているかを知ることができる規則的な対応関係を、言語間にいくつも設定することに成功して、はじめて言葉の系統が証明される。もちろんアカ語、ビス語、ラフ・シ語、ラフ・ナ語、リス語、ビルマ語の間に対応原則をいくつも設定することができる。その対応関係の上に、さらに有力な証明力をもつ事実もある。それは一つの意味分野の中で相対立した概念を表明する形式を、言語間で一対として対応する事実である。たとえば<大きい>と<小さい>、<多い>と<少い>が、その中のどれかが他の形と入れ替らないで、それぞれ一対として対応しているとすれば、その親近性はすいぶんと増大する。

	Akha	Bisu	Burmese
<big>	jo-hù	: ag-hù	: a-kri ²
<small>	jo-ńí	: ag-jí	: a-ŋay
<many>	jo-mjà	: ag-bjà	: a-mya ²
<few>	jo-ní	: ag-ní	: a-nañ ²

今一つ例をあげよう。<高い>と<低い>、<長い>と<短い>、この両者のプラスとマイナスの対立は、<高さ>に求めているか<長さ>に求めているかの相違だけで、実は同じ相対関係である。ビス語では、この二対の対立関係を、ただ声調だけが違う同じ

音素連続であらわす。〈高い〉〈低い〉は中平型、〈長い〉〈短い〉は高平型である。

	high	low	long	short
Bisu	aŋ-hmɔŋ	aŋ-hñum	aŋ-hmɔŋ	aŋ-hñúm
Akha	ja-gó	ja-ʔɔ	ja-móŋ	ja-ním
Bur.	a-mraŋ ³	a-nim ³	a-hrañ	a-tu

アカ語は〈長〉:〈短〉がビス語に対応するが、〈高〉:〈低〉の方は、他の形に置き換えている (gó はチベット語の mgo<頭, 頂>に, ʔɔ はチベット語 ʔog<下>, ビルマ語 ʔɔk にあたる形である。cf. 漢語 高, 奥)。ビルマ語では〈高〉:〈低〉はビス語形にあたるが、〈長〉:〈短〉の方は別の形に替っていると、アカ語の〈長〉:〈短〉とビルマ語の〈高〉:〈低〉を結び付けるか、あるいは全然つながりのない形として扱ってしまうであろう。ラフ語・リス語になると、この意味対立に応じる形式の対応関係はずっとあやしくなってくる。このような意味分野ごとの対応関係を見ていくことは、これらの言語の変遷をあとずけるための有力な方法となるのみならず、言語間の親近さの度合を測る重要な手段にもなる。

今回、私が調査した言葉は二つのグループにわかれる。アカ語とビス語はビルマ語に近いいわば主流派の言葉で、それに対してラフ・シ語、ラフ・ナ語とリス語は、それらとはやや離れたロロ諸語の系統に属する言葉である。さきにあげたビルマの北方にいるマル語、ラシ語もこの主流派のほうに属する。

この二つの subgroup を分けるもっとも大きい特徴の一つは声調のシステムであろう。ロロ系統の言葉は、声調が4つから7つに分割されているが、主流派の言葉は、いずれも三種の register tone systemをとっている。

アカ語の高平型は、ビス語の高平型、ビルマ語の中平型に対応し、アカ語の低平型は、ビス語の低平型、ビルマ語の高平型に、アカ語の中平型は、ビス語の中平型に、そしてビルマ語の高降型 (-k, -p, -t, -c に終る音節は含めない。高降型は本来緊喉母音をとまなう中平型であろう) に対応するのが原則である。たとえば

	bowels	egg	head	pot
Akha	ú ² (High)	ʔu(Middle)	ù(Low)	ʔœ-lɔŋ

Bisu	aŋ-ʔú(H)	hja-ʔu(M)	x	ʔù-hlɔŋ
Old Bur.	uu(M)	u ³ (F)	uu ² (H)	u ²

この対応原則はほとんど一貫している。一見例外に見えるつきの形態素でも実は例外ではないことが証明できる。

	star	tongue	foot
Akha	ʔa-gú(H)	mè-lá(H)	ʔa-khú(H)
Bisu	ʔù-kú(L)	mèn-hla(L)	là-khú(L)
Old Bur.	kraj(M)	hlya(M)	khrij(M)
M. Bur.	ce	hlya	chei

ビス語の形態素 khù<foot>は、単語<trousers> khú-tshòŋ では高平型をとるから、低平型につづく第二音節の位置では高平型から低平型への移動が起きたものと推定できる。この推定は三谷君の調査したタコーの方言で、これらの単語がいずれも低平—高平の形をとっていることから支持できるであろう。

帰国して以来、資料の整理を進めている中に、言葉の伝承の確実さに、私は少なからず驚いている。アカ語もビス語も、他の言葉の形にとらわれることなく調査したものである。ビス語の調査のときは、真実この言葉がアカ語に近いなどとは気がつかなかった。ところが、あとでこの両者をつき合わすと、表面的にはいろいろの違いがあるが、何と基本的な点で根強く一致しているではないか。アカ語、ビス語、それにビルマ語が極めて密接した形をもったのはずっと過去の段階であり、それが文字に記録されることもなく、世代を重ねて受け継がれ、しかもそれぞれの時期で変遷しながら、さらに部族そのものが長い移動を経て今日に到ったにもかかわらず、いま両者を比べてみると、基本的な構造面に、そして声調までもがはっきりとした対応関係を保存しているのは驚異でもある。

私はこの経験から、一般に言語の比較研究がもっている証明力に、改めてより大きい信頼をおくことができるようになった。

[この調査に多くの便宜を与えていただいた National Research Council ならびに内務省の Division of hill tribes, Dept. of Public Welfare ことにメーチャンとタークの Nikhom の方々の field における援助に対して厚く感謝しなければならない。]